



## 郷土史への扉

大隅国の建国は、当時の南九州にどのような影響を与えたのでしょうか。大隅国ができて中央から赴任した国司たちは、国府の建設を進めながら国の基本政策である律令政治を目指し、郡や郷である下部組織を整えながら、その実現に努力していたと思われます。

### 一 大隅国守の殺害

建国によって朝廷支配が強化され、隼人の人々は厳しい制限の中での生活を余儀なくされました。

中でも、租（耕作面積に合わせて治める税）・庸（布を納める税）・調（その土地の特産物を納める税）の徴収や戸籍の作成などに対して、隼人たちは強い不満と警戒心をもっていただと思われれます。

この不満が爆発したのが、建国して七年が経過した、養老四（七二〇）年大隅国守であった『陽侯史麻呂』の殺害から始まる「隼人の抵抗」です。

『続日本紀』の養老四（七二〇）年二月二十九日の記事では、次のように伝えていきます。

「大宰府奏して言さく『隼人反きて大隅国守陽侯史麻呂を殺せり』とまうす」

### 二 朝廷による隼人征伐

この出来事を現代風に言いますと、国が任命した長官（県知事に相当）を殺害するようなもので、朝廷にとつては国の威信を失墜させる大事件でした。このことは、大宰府からの報告から四日後の三月四日に、朝廷が隼人討伐の勅命を出しており、隼人の抵抗の鎮圧に対して迅速な対策を講じたことからも分かります。

朝廷は、万葉歌人としても名高い大伴旅人を征隼人持節大將軍に、笠朝臣御室と巨勢朝臣真人の二人を副將軍に任命しました。持節大將軍の持節とは、將軍が出征のとき天皇から刀を賜うことで、天皇の名代として軍隊を指揮することをいいます。

古代の軍制を定めた軍防令によると、一万人以上の軍隊を動かす時は、副將軍二人を配することとなっており、隼人の抵抗の鎮圧に一万人以上の軍隊が組織されたことが分かります。

### 三 隼人包囲網

では、それらの軍隊は、どの地域の人々で組織されたのでしょうか。十一世紀に編さんされた『類聚三代格』に

シリーズ大隅国を知る ⑤

# 隼人の抵抗 ①

よると、九州の軍団は、筑前・肥後が各四軍団、筑後・肥前は各三軍団、豊前・豊後は二軍団であったと書かれており、九州全域から動員されたことが分かります。

また、『続日本紀』の養老七（七二三）年四月の記事に、「大宰府言さく『日向・大隅・薩摩の三国の士卒、隼賊を征討して、しきりに軍役にあい、かねて年穀実らずして、互いに飢寒（飢えや寒さ）に迫れり』（後略）」とあり、日向・大隅・薩摩からも参戦したことが記されています。特に、注目したいのは、大隅国内からも出陣したことです。これは抵抗した人々が大隅国内の一部の人々であって、肝坏郡・大隅郡・始禰郡をはじめとする建国以前から従属していた人たちは、朝廷側について反

乱軍鎮圧に参加し、隼人同士の戦いもあったことを物語っています。

### 四 奮戦した隼人

このように、大伴旅人を総司令官とする大和や九州各国から組織された一万人以上の大軍が、隼人征討を目指して国分地方に殺到して来た様子が想像されます。

当時の大隅国全体の人口はおよそ二万七千人ほどとされていますので、朝廷側の決意の強さを垣間見ることができそうです。隼人側は人数的に劣勢の中、一年半に渡る抵抗を続け、ついに陥落しました。

隼人の戦いの様子については次回紹介します。

（文責：鈴）